おひさまsummer

詩代　歩溜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おひさまｓｕｍｍｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ５９０９Ｚ

【作者名】
詩代　歩溜

【あらすじ】
１３回目の夏をむかえようとしていた千歳。
いろいろあって、孤独だと感じることが多くなっていたある日のこと。
「ぴーなっつ」
わけのわからない声と共に謎の人物が現れた。
この人が千歳の人生を大きく変える。
人と向き合うことをやめた千歳がどんどん人と接していって・・・。

プロローグ（前書き）

大切な人と過ごす夏。

1秒でもいいから一緒にいたいんだ。

1秒じゃたりないんだけどね。

プロローグ

太陽出てるね。

今日は雨のはずなのに。

天気予報士さん残念。

でも私は嬉しいな。

昨日は「明日は雨なんだ。」ってすごいがっかりだったのに。

今、晴れててこんなに嬉しいのって天気予報を外してくれたおかげじゃないかな。

最初から晴れって分かってたらこんなに嬉しくなかったはず・・・。

天気予報ありがとーーう！

まぁ、でも、晴れだからって何かあるわけじゃないんだけどね。

お空の上で喜んでるあなたを想って私が勝手に喜んでるだけだよ。

きっと今日はいい日だよ！

ニュースの占いでは最悪だったけどね。

プロローグ（後書き）

文法の誤りや、おかしいところなどあったらお手数ですが教えてください（＾ｖ＾）
これからも続くので、よろしくお願いします。

lost father

「いってきます。」

その言葉に対しての返事はない。前までは、「いってらっしゃい。」の声が聞こえないと部屋中捜しまわって家族を見つけて、無理矢理言わせてた。けど今はそんなことしたって時間の無駄。だって誰もいないもん。いつからだろう？お母さんが帰ってこなくなっちゃったの。最初は寂しかった。去年・・・だから、中1までお母さんと一緒に寝てた私が、今はベッドに一人どころか家の中に一人だよ。不安で仕方なかった。ま、それも最初だけ。今は慣れっこさ。そうか、あれは1年くらい前のこと。

ーーーー

「お母さん！私、13歳になった記念に一人で寝る！」

私は自信満々に言った。それもドヤ顔で。でもお母さんは、

「そう、これで広々寝れるね。」

と、このひとことしか言わなかった。この時は何とも思わなかったんだ。

3ヶ月後・・・

お父さんが、仕事から帰ってくるなりこう言った。

「転勤が決まった。だから・・・。離婚してくれ。」

その時２０時で私とお母さんは夕飯を食べていた。お父さんの分もちゃんとあった。

「本気？なんの冗談？今日はエイプリルフールとちゃいますよ。」

茶化すように私が言ったらなぜか怒られた。え？え？なんで私怒られたのかな？

「・・・分かった。」

はい？分かった？ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ？イヤイヤ、私全然分からない。お母さんは何が分かったの？離婚だよ？離れ離れだよ？訳が分からないよ・・・。

「お母さん！お父さん！なんなの？説明してください。」

私が説明するよう催促すると、お母さんがクリップでつままれたように開きずらそうな唇を開けて説明してくれた。

「あのね、お父さんはね、私たち以外に大切な人がいるんだって。だから、私達は離れなきゃいけないの。一緒にいちゃいけないの。ずっと黙っててごめんね。千歳（ちとせ）はお母さんとずっと一緒にいようね。」

え・・・？私はいまだに状況が理解できない。けど、お母さんは泣いている。もう、それだけでただ事じゃないことが分かった。

「お母さん、泣かないで！お父さん！私たち以外に大切な人がいるってどういうこと？」

お父さんは真顔で答えた。

「お父さん、好きな人がいるんだ。でも、お父さんにはお母さんや千歳がいるから・・・。今まで何もなかった。けど、お父さん、福岡に転勤が決まったんだ。それで、その人に、「一緒に住もう。」って言われて。お父さん断れなかった。だから、こんな中途半端はいけないと思って、こうすることに決めたんだ。」

お父さんの言葉を聞いて、なぜか悲しいとか、寂しいとか感じなかった。感じたのは怒りだけ。

「私、13年生きてて、幸せじゃないって感じたことなかった。でも今日初めて感じた。あぁ、私、不幸だな。って。こんな父親持ったこと。ううん。そうじゃない。ずっと不安でいっぱいだったお母さんの気持ちに気付けなかったことだよ！この上ない親不孝者になっちゃったんだよ、私。仕方ないよね、お母さんを幸せにできなかった者同士一緒にいたってさ。丁度良かったんだよ。離れることになって。でも、一緒にしないでよね。お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかったけど、私はこれからお母さんを幸せにしてみせるんだから！」

そう言い放った私の目にはもう涙が溢れてたことは言うまでもないよね。私が怒りを感じた相手って、こんな最低なお父さんにじゃなくて、自分自身だったんだね。

お父さんのために用意してあった夕飯が食べられることなく冷たくなって、テーブルの上で佇んでた。

数日後

お父さんは家を出て行った。お金のことはちゃんとするみたい。私にはよく分からなかったけど。
その日も、お父さんがいなくなったこと以外は何も変わらないこの家で、私はお母さんと夕飯を食べた。私の好きな牛丼だった。紅ショウガたっぷりの。私はいつもなら、夕飯の時に、その日あった出来事を話したい放題話していた。お母さんはちゃんと聞いてくれるの。でもね、その日は何も話せなかった。お父さんのこと以外の話題がなかったんだ。沈黙が続く。お母さんだから、沈黙してても別に気まずくはないんだけど、なんか落ち付かなくて牛丼の味が分からなかった。そんな時、お母さんが何か思い出したように話しだした。

「お父さんがさ、離婚の話を出した時、千歳がお父さんになんか話してたよね。あれね、お母さんすごく嬉しかった。でもね、千歳はひとつだけ間違えてたよ。「お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかった。」って言ったでしょ。あれね、違うよ。」

「え・・・？」

「お父さんだってひとつだけかけがえのないものくれたよ。」

「・・・？」

「千歳だよ。お父さんは千歳をくれたんだよ。ほら、ひとつ幸せくれたよね。」

涙目で話すお母さんの顔を見て、私は大泣きした。さっきまで味のなかった牛丼が、いきなり塩味になった。そんな私を見て、おかあさんはやさしく笑ってた。

—
—
—
—

ぴーなっつの出会い

もう7月。あと2週間で誕生日が来る。去年まで、「たんじょうび」と聞けば、

（プレゼントはなにもらおう？）

それしか考えてなかった。たった1年しか経ってないのに、1年前の自分がひどく幼く感じる。いや、大人ぶってるわけじゃないんだよ？でもさ、今年は誕生日どころじゃないんだよね。早くお母さんをみつけなきゃ。このままじゃｌｏｎｅｌｙ Ｂｉｒｔｈｄａｙになっちゃうよ。

キンコーンカンコーン♪

鐘が鳴った。よし、お弁当だ。今日も屋上でランチタイム。屋上とかベタなスポットなのに案外誰も使わないんだよね。あ、みんな教室で食べるもんね。普通は。まぁ、いいや。お昼食べよーっと。

風が気持ちいい。空はこんなに晴々としてるのに、私だけ何でこんなにモヤモヤしなきゃいけないの？ほら、さっき教室にいたクラスメイトだってみんな、何も考えないで、ただ平凡に暮らしてるんだよ。この世に神なんて存在しないんだ。平等なんてありえない。

私は卑屈。妬みっぽくて僻みっぽい。相手に悪く思われたくないから誰にも愚痴など言ったことがない。だけどそれは、“いい子”なんかじゃなくていい子ぶってるだけなんだ。家でも外でも。

こうして屋上に来るといつもこう思う。

「なんで私だけ？」って。

私以外の人もみんなモヤモヤすりゃいいんだ。って・・・。モヤモヤの原因は大体分かってる。けど、その原因無くそうってする気持ちはないわけじゃないのに、怖くてさ。できないの。

私って可愛そうなのかな・・・。

もってきたお弁当箱を開きもせず、青い空を眺めてただぼーっとしてたら、なにか幻聴のようなものが聞こえる。

「・・・っつ？」

なんか男の子のような声。低くて。耳をふさいでも聞こえるの。体の底から響いて聞こえてくるの。重低音って言うのかな？なんか眠くなってきた。

「ぴーなっつ。だってば！」

今度こそはっきり聞こえた。後ろだ。

振り向くとそこには男の子が立っていた。

「な・・に・・・？」

あれれ？なんで私ビビってんの？男子苦手だから？いや、そんなことじゃないな。あ、苦手だけども。

「やっと気付いた？オレ、９ヶ月も一緒にいたのにな。」

はひ？９ヶ月？

「それって・・・。」

「なに？」

「ストーカー・・・？ひぃぃぃ～～？！」

あろうことか私は取り乱してしまった。

「オレがストーカー？違うよ。ストーカーってあれだろ？あとつけて、電柱柱（でんちゅうばしら）の陰からこっそり観察して、家まで着いて行って、そんでもって盗撮とかしちゃうやつだろ？」

「そうだね。詳しいんだね。」

冷めた目で見てやった。

「だからちげぇって。話しを聞けぃ！」

とりあえず私はその、“ぴーなっつ男”の話を聞くことにした。

ぴーなっつのわけ

ぴーなっつ男が話し始める。

「ちゃんと聞けよ？めんどくせぇから1回しか言わねぇぞ？あのな、9ヶ月前って言ったらさ。率直に言うけどおまえの父ちゃんが出てった時期だろ？そう、その時くらいからオレはおまえの傍で暮らすことになったんだ。もちろん見えなかっただろうな。今までは。それはおまえの孤独な気持ちが小さかったからだ。でも今、オレがこんなにハッキリ見えるってことは・・・。おまえは相当孤独なんだよ。」

苦笑いで話すぴーなっつ男。なぜだか無性にイラついた。

「私孤独じゃないよ！なにそれ！全然孤独じゃない！」

全力否定してやった。何よこの男は。初対面の人に、孤独だ、孤独だって。失礼じゃない。

「だから初対面じゃねぇーんだって。」

はい？

「何勝手に人の心読んで！個人情報保護法を無視する気？！」

誰かと話すのなんて久しぶりだった。だからなぜか私のテンションはおかしかった。

「おまえのどの辺が孤独じゃないって？」

人の質問は無視かい・・・。

「どの辺って・・・。じゃ、じゃあ、逆に私のどの辺が孤独なの？」

「んー？何個言えばいいんだ？とりあえずまぁ、強いて言うなら・・・。自分の思ってることちゃんと伝えられない？ってか伝えられる相手がいないとこかな。」

腕組みしながら、すました顔でいうぴーなっつ男。むかつくけど、まぁ、言ってることは正しいかもしれない。私、思ったことどころか、会話が出来る相手すらいないもん。

あれ？なんでかなぁ。この人には私、普通にものを言うことできる気がする。さっきもちゃんと、

「自分は孤独じゃない。」

って伝えられた。結果それは間違いだって気付かされちゃったけど・・・。なんか途端にこのぴーなっつ男に心開けてきた気がした。

「オレに言いたいこと言えるのはな、オレとおまえはぴーなっつだからだ。」

「はぁ？」

ごめん。前言撤回だ。心開けた？こんな変人に？ないない。

なにがぴーなっつ？ってかどんだけぴーなっつ好きなの？この男は。

「やっぱ変な顔したな。ははっ。今、意味分かんない奴だって思っ

ただろ？当然だけどな。」

「・・・。」

「ぴーなっつってさ、どんな状態だ？」

「ぇ・・・？どんな状態って？えっと、一つの実に、二つタネが入ってて・・・。」

「そうそう。そのタネがオレとおまえ。」

「はぁい？」

「オレがおまえの傍にいることはおまえが生まれた時から決まってた。驚いた？」

「おぉ・・・おふぅぅ・・・。驚いた。」

いまだに理解できてない・・・。生まれた時から決まってた？えぇっ？！

「え、でもさ、私の傍に来たのは9ヶ月前なんでしょ？おかしいじゃん。」

「あぁ、傍に来たのはな。でもそれより前からおまえのことは知ってた。」

よく分かんないなぁ。なんで9ヶ月前なの？お父さんのことが関係あるって言ってたけど・・・。

「それはおまえが寂しがってたからだ。んー、孤独ってやつかな。」
またそれか。孤独か。ってか人の心をまた読んだのか・・・。まあいいや。
「私が孤独だからアンタは私の傍に来たの？」
「そうそう。あとさ、オレ、ぴーなっつ男じゃない。」
しまった。この男は心が読めるんだった。
「じゃあなんていうの？」
「太陽（たいよう）・・・だよ。」
小さい声で、この目の前にいる太陽は言った。
「太陽か。ふふ。温かそうだね。」
私がそう言うと、
「あれ？笑わないの？」
すごく不思議そうな顔して聞いてきた。

「え、なんで笑うの？」

あぁ、私も質問返ししちゃった。

「うん。まぁいいや。今度話すよ。それじゃ、教室戻れ。」

「うん。」

なりゆきにまかせて

太陽と衝撃的な出会いをして、まだ、現実なのか夢なのかよく分かってない。５時間目は体育。着替えなきゃ。そう思って教室に入ると誰もいない。あれ？時計時計。・・・ん？

いやぁぁぁぁーーーー！？

時計の針達は１時４０分をさしていた。授業開始から１０分も経っている。いままでベル席（授業開始のチャイムが鳴り終わってから席につくこと。）なんてしたことない模範的生徒だったのに・・・。よし、こうなったら仮病だ。保健室へＧＯ。

保健室は私の教室、２年２組の教室を出て、３０段階段を降りて、反対側の校舎の１階。あちゃ、渡り廊下を渡るんだ。あそこは校庭からよく見える。ダメじゃん・・・。体育の教科担任、吉川先生はなんかすごく怖い。このまえなんて、授業中ふざけてる男子に柔道の・・・なんちゃらって技かけてたし。痛そうだった。ベル席なんてしたらよくあるあの、校庭何周～とかいう罰をうけるに違いない。それだけは免れたい。じゃあどうするか・・・。

「なぁ。」

太陽？なんでここにいんの？

「ここにいちゃダメじゃん！見つかったらやばいよ？！」

「え、なんで？今日は転校手続きをしに来たんだけど。まぁ、ホント言うと入学手続きなんだけどな。」

「なんで？太陽が？この学校に？入るの？なんで！？」

「おまえが寂しくなくなるまで傍にいるんだから、学校だって一緒に行くんだよ。今までだっておまえと一緒に授業受けてたんだぜ？おまえが気付いてないだけで。」

え？？一緒に？

「じゃあテストの時とか回答見てたってこと？！」

「当たり前じゃん。」

ぬわーんですと？？

「勝手に見ないでよ！」

「別によくね？平均点よりちょっと下ってだけじゃん。」

それがいけないんだって・・・。それにあのときは平均点がかなり下がってた時だしね。それで平均点以下って・・・。人に再び面を向かうべからず、だわよ。

それに、太陽って喋んなきゃ、まぁ、顔はいいと思うし、背も高いし。髪の毛サラサラだから、学校なんて来たら「彼氏ほしい～」って言うのが日常茶飯事になっちゃってるうちのクラスの女子の格好の餌食じゃん！

いや、今そんなこと考えてる暇はない。

「早く行かなきゃ！」

「それならオレにいい考えがある。」

「なにさ。」

「簡単なことだよ。オレの横を普通に歩いときゃ、おまえはちっちゃいんだから校庭から見えないだろ？」

あ、そっか。そんな簡単な事か。って

「人の子とさらっとチビ呼ばわりしてんじゃないわよ！」

「１５５ｃｍで、よんじゅ・・・ぷっっ」

「なんで、なんで、なんで体重まで知ってんの？！変態？」

「は？よんじゅうまでしか言ってねぇだろ？！」

「なんだ知らないのか。ほっ。」

「保健室いくんだろ？ほれ。」

太陽がいきなり私の腕を引っ張った。

あっという間に渡り廊下に着いた。

「普通に歩けよ？」

「う・・ん。」

うわぁ。なんか緊張してきたよ。ばれないと思うけど・・・。あれ、渡辺君見てる？気のせいか・・・。なんか長くない？こんな長かったけ？この廊下。ん？なんか顔が熱くなってきた・・・。心臓がドキドキというかフィーバーしてる。。。

「着いたぞ？そこだろ。保健室。行ってこいよ。」

「あ、着いた？太陽、ありがと。」

私が軽くお礼を言うと太陽は微笑んでた。気持ち悪いな。

なんだアイツ。

「失礼します。」

「あら、福井（ふくい）さん。あ、ごめんなさい。ホントに。」

「いや、全然・・・。」

両親が離婚して、私の苗字は福井から夢咲（ゆめさき）になった。

「あの、夢咲さん。どうしたの？」

「頭が痛くて・・・。」

うそうそ。ちょっと顔が熱いだけ。

「ホントね。顔がちょっと赤い。熱測ってみて？」

そういって、保健の先生、花園(はなぞの)先生は、体温計をくれた。

・・・。

「ピピッ」

37．0℃

ミラコーだ！ミラコーが起こった。あら、神様っているんじゃん？

「どれ。あら、37℃か。どうする？帰る？もう少し様子みる？」

即答で。

「帰ります・・・。」

「じゃあ、荷物持ってくるね。」

「あ、自分で行くので平気です。」

「あ、だいじょぶ？じゃあ電話しなきゃ！夢咲さん、お家の番号は？」

「家、誰もいないので、歩いて帰ります。」

「平気なの？私が運転できればなぁ。気をつけてね。」

「はい。ありがとうございました。失礼します。」

早退届けだけ持って私は保健室を出た。

あら、太陽君。ずっとそこにいたのね。

「うん。あ、どうだった？」

え？この方、心読めるんじゃなかったの？

「なんか、読める範囲があるらしい。」

「読める範囲？」

「あぁ、壁一枚はさむと読めない。多分表情で判断してるからだ。」

「表情？」

そうか。表情か。じゃあ、

（アイス食べたい。）

そう思って、とびっきり変な顔をして太陽を見た。

・・・。

なに？この沈黙・・・。もしかしてスベッた？恥。

「・・・ぶふっ。「アイス食いたい。」だろ？」

「なんで？何でわかったの？」

「え、顔に書いてあった。」

はひ？あんな顔に？どの辺に？理解不能だ。

「熱が、ちょっとだけあった。」

「大丈夫なのかって・・・当り前か。」

「ふふっ。あ、荷物持ってこなきゃ。」

私と太陽は行きと同じ方法で渡り廊下を渡って教室にたどり着いた。

後ろの方の扉を開けた。

！！！

渡辺君？！え？なんでいんの？

「あ、夢咲さん。そちらは・・・？」

なんか言ってる。え？私？何で私に聞いたの？私はあなたと喋りたくないんだけども。

「あ、オレは・・・太陽。明日からクラスメイトだよ。よろしくな。」

にっこりして太陽が言うと、

「こっちこそ。」

って渡辺君も笑った。

「じゃあな。」

私達が教室を出てくと、渡辺君が手を振っていた。

なんだ・・・。渡辺君っていい人じゃん。なのに私、勉強以外に興味なさそうだからって勝手に嫌なイメージ持って・・・。最悪じゃん。私。私以上にブラックハートな人っているのかな？

「まぁ、第一印象でイメージよくないのは仕方ないとして、話そうともしないで悪いイメージ持つのはよくないはな。」

「そうだよね。気をつけなきゃ。」

今度渡辺君と話してみようかな。

「あれ、太陽も帰るの？」

「当たり前じゃん。」

「どこに？」

「は？おまえと一緒んとこだよ。」

「はぁ？？」

私達は校門を出た。

そこにあるもの

・・・・・・・・・・。

あれ。ここは私の家ですよね？なんで私の居心地が悪いのかな？

それは・・・

「オレがいるから、だろ？」

「分かってんならなんで入ったんだよ？？大体今日初めて会った人をうちに入れるなんて・・・。」

「だから初めてじゃねぇって・・・」

「私にとては初めてなの！」

「変な感じだな。オレは半年以上一緒にいるのにな。」

「知らないよ。。。でも、いや、やっぱなんでもない。」

「初めて会う割にはよく話せるのが不思議・・・だろ？」

「分かってんならいちいち声に出すな！なんか恥ずかしいじゃん。あ、そうだ。さっきさ、授業も一緒にうけてたって言ったでしょ。でもなんでクラスのみんなにバレなかったの？」

「え、おまえがオレを見れなかったように、おまえがオレのこと見えるようになるまでは他の奴にも見えないんだよ。」

「そういうもんか。聞きたいことたくさんあるんだけど・・・。全部聞いてもいい？」

「ん。別にいいけど。」

「じゃあさ、私が生まれた時から太陽が私の傍にいることは決まってたって、あれはどういうこと？」

「あぁ。人ってさ、絶対魂を持ってんだろ？でもオレみたいな奴らは単体の魂じゃ、体に入る事も何かを考えることもできない。つまり、ホントの人間の魂と同盟を結ばなきゃ生きれないってことだ。その同盟の名前がさっき言ってた「ぴーなっつ」だよ。それは代々継がれてきた名前らしい。オレはおまえに呼ばれた。その時から同盟は成立する。そんだけの話だよ。」

そんだけ？やばい。まったく分かんない。「ぴーなっつ」のくだりまでは分かった。けど、私が太陽を呼んだ？なにそれ？

「魂が呼ぶんだよ。んー。逆に言うと、オレらは人間の叫びを聞くと引き付けられるっていうか・・・。あ、でもすげぇんだぞ？同盟結ぶって。大抵は結ぼうとすると「なんか違う。」ってなって結べないことが多い。それほど強い叫びじゃないと結べない。じゃなきゃ、オレみたいにずっと一緒にいる。なんて軽々しく言えねぇもん。」

「そういうもんかぁ。同盟ね。貿易みたいだね。私と太陽はなんで結べたのかね？なぞだ・・・。」

「それはオレにもわかんねぇ。けど今オレに入ってきてる情報では

同盟を結べたのはオレとおまえと、あともう1組だけらしい。すげぇな。」

すげぇっ。だって世界中で人間って約７０億人でしょ？７０億分の２ってやばい！世界規模で抽選２名様のキャンペーンやったとして、私ともう一人誰かが当たったってことでしょ？うわぁー！私今まで何応募しても当たったためしがないのに。

お父さんはよく当ててたな。お父さん、今何してんのかな。元気かな。最初のうちはやっぱりお母さんの心を傷つけたお父さんが許せなかった。けど時間がたつにつれてお父さんとの思い出が蘇ってきちゃってさ・・・。あれ。おかしいな。目から涙が・・・。鼻から鼻水が・・・。

「おまえさ、泣きたいときにどうして我慢すんの？泣きゃいいじゃん。」

「・・だって。泣いたっておかあざんもおとうさんも帰ってくるわけじゃない・・・。」

「泣いたら帰ってくるなら泣くのか。じゃあ一生帰ってこなかったら？？一生泣かねぇの？無理だろ？そんなこと。人間なんだから泣け。無理して笑うな。」

「うん。うぅあぁぁぁーーーー・・・・・・！」

このあとどんくらい泣いたんだろう？太陽の服鼻水と涙でびちゃびちゃだった。ごめん。

いっぱい泣いたらすっきりした。けど、目が膨張した気がする。

この後も太陽に色々質問した。

―私のところに来る前はどこにいてなにをしてたの？―

―寝てたんだよ。空の上で。おまえに呼ばれたから行ったら、大きくなってて驚いた。―

―太陽はどうやって生まれたの？なんで男なの？―

―それだけはオレにも分かんねぇや。―

―太陽は言葉とかどうやって覚えたの？―

―目が覚めた時にはなぜかもう理解できてた。―

最後にもう一つだけ・・・

「どうして太陽って名前なの？」

「どうしても話さなきゃダメか？」

「うん。だめ。」

「なんか。目が覚めて、おまえのとこに行く前、不思議なじいさんに会って、あの子のとこへ行くなら名前がなきゃ不便だろうって、その、なんか、おまえにとって太陽みたいに温かい存在になれって。言われて・・・。だぁ！なんだこれ。」

激しく照れる太陽が可愛く見えた。

「そんな由来があったのか。なんで、」

「え？」

「少しも恥ずかしがることないじゃん。そんな由来なら嬉しい。」

素直に私は嬉しいと思った。

私は太陽の姿を今日初めてみたけど、やっぱりどこか初対面のような気がしないのは、私達が

「ぴーなっつ」だからなんだね。

ピルルルルルルルルッ・・・

あ、電話。はい？知らないなぁ。無視しようかな。

「出ろ！」

え？

「はい、夢咲です。え・・・・・？」

電話は病院からだった。

過去の涙にさよなら

午後４時だった。家に電話が来た。病院からだった。お母さんが病院に運ばれたらしい。８ヶ月前に家を出て行ったお母さん。出て行った理由は私にも正確にはわからない。けど、明らかに元気がなかったのは分かった。お父さんが出て行ったあの日の夕飯、一緒に牛丼を食べて以来お母さんとは一緒に食事をしてない。次第にお母さんはあまり家に帰ってこなくなった。私が学校に帰ってくると、たまにお母さんがいる。

――――

「ただいま・・・。あ、お母さん。帰ってたの。今日のご飯は?」

「うるさい。」

「ごめん。じゃ、あとで私が作っておくね。お母さんのす・・・」

「うるさいっつってんじゃん！お母さんの分はいらないから！」

「そう。」

お母さんは寝室へ行った。今は６時半。まだ寝るはずないよね。

「いただきます。」

テーブルの周りには３つイスがある。使われてるのは１つだけ。お父さんが出て行ってから２週間経つのにいまだにお父さんの歯ブラシ、コップ、箸、などは残っている。捨てればいいのに。

私は年相応に料理はできる方だけど、あんまり美味しくできないんだよね。なんでかな。

あ、明日資源回収だ。お父さんのもの出しとこう。

翌日

ゴミを出した。

今日は月曜日だから部活がない。早く帰ってこれた。

あれ？

開いてる。お母さんいるのかな。

「ただいま。」

「千歳？ちょっと・・・」

お母さんに呼ばれた。なんだろう？

え？荒らされた部屋。お母さんの、今まで一度もみたことが無いような怖い顔。あれ、私、朝、鍵かけたよな？空き巣はないと思うんだけど・・・。

「お母さん何？」

「お父さんのもの捨てたの千歳・・・？」

「え、そうだよ。いつまでも持っててても仕方ないかなって・・・。」

一瞬間が空いた。

「っ・・っざけんなよ!?なんであんたはそうやって勝手なことばっかするんだよ!!」

な、なになに?お母さん何?え、苦しい・・・。やめてよ。

どかっ

あ・・・。

「お母さんごめんね?」

勢い余ってお母さんのこと蹴っちゃった。

「あんたはホントに親不孝もんだねぇ。ははは っ。親の顔が見てみたいねぇ!!それは私だよっ!!」

お母さん?もうこの人はお母さんじゃない気がする。

ーーーー

この出来事があってから2週間後くらい経ってから、朝起きるとお母さんの姿がなかった。朝いないことはたまにあったから別に驚かなかったけど、その次の日も、その次の日も、お母さんは一度も帰ってこなかった。

「千歳はお母さんとずっと一緒にいようね。」

あの言葉。信じてたのにな。

やだやだ。また涙が。

今は電車の中。太陽と2人で総合病院まで行くの。お母さん危険な状態らしい。

薬物だって。この前学校で習った。私は絶対嫌だと思った。怖いもん。なのにそれをお母さんがしてたなんて。信じられない。

着いた。

「あの、夢咲です。」

受付の看護師さんに声をかけた。

「あ、夢咲さんですか。あちらへ。」

私達は、指のさされた方へただひたすら進んだ。お母さんのいる場所はすぐに分かった。けど、なんか途端に怖くなってきた。でも、入らなきゃ。

「お母さん・・・？」

これがお母さん？誰かと思った・・・。

お母さんはこんなに痩せてない。

お母さんはこんな顔色悪くない。

お母さんはもっときれいな髪の毛だった。
お母さんはもっと・・・優しそうだった。
なんで？なんで？お母さん？起きないし・・・。
「お母さん？お母さん！」
いくら呼んだって１ｍｍも瞼は動かない。
「今日は、もう帰ろう。な？また元気になったら来ような。」
太陽が私の背中を押す。私は従うしかなかった。
ダメだ。今、口きいたら絶対涙が・・・。あ、そうだ我慢しなくていいんだ。
「太陽。お母さん平気かな。死んじゃったりしないよね？」
やっぱ出て来た。もう止められないや。
「あぁ。信じてろ。」
「え？」
「お母さんは死なないって信じてろ。そうすりゃ大丈夫だ。」
「うん。そうする。」

根拠はないけど、そう信じることにした。今私は泣いている。それに笑っている。

もう過去のことで泣くのはやめよう。私は未来、これから先に繋ぐために泣こう。

お母さんが無事であることを信じて・・・

はじめまして。

昨日は大変だった。お母さんが病院に運ばれたことを知り、そのことがショックで泣き崩れた。いまだに立ち直れてない部分もある。お母さんが病気か何かで病院に運ばれたならそこまでショックではなかった。でも、麻薬関係だったら体調がよくなり次第、刑務所行きでしょ？そんなの・・・。でももう泣かないよ！昨日泣き切ったもん。太陽に迷惑かけたし。ウジウジしてたって変わんないもんね！元気に行こう。

太陽は結局家に住むことになった。なんか他人と思えないし。ご恩もたくさんあるからさ。

それにしても・・・。私の部屋で寝ることなくない？？

「いつもここで寝てたから。」だって。えぇぇぇぇ？？？いつもかい！って話だよ。っていうか・・・。

「おはよ。」

！！！？

「いきなり話しかけないでよ！」

「どうせ起きてたんだろ？早くしねぇと遅刻だぞ。」

「８時半までに登校すればいいから平気ですぅ～～！！」

ん？7時５０分。Ｏｈ！Ｎｏ！

私の家から学校まで、２？ちょっとある。だからいつも7時４５分には家を出ている。これじゃあ、朝ご飯食べれないし・・・。お弁当も無理だ・・・。パン注するしかない。お金お金。

・・・あれ？なんか見てる。

「・・・。」

何が言いたいんだ？私はあんたの心は読めないっつうの。

「お金・・・下さい。」

あぁ。お金か。

「いいよ。でもＤパンね。（一番安いやつ。）」

「マジか・・・。」

そのＤパンは成長期の敵かっ！てくらいの量しか入ってない。でも私のお小遣いの量ではこうするしかないんだよ。お金どうしよう。この先１ヶ月分の生活費があるかどうかくらいだ・・・。

時間ヤバい。それはあとで考えよう。

髪の毛は寝癖付いてるからお団子にしちゃおう。歯磨き完了！出発！

「間に合わないかもだから走るよ！」

「おう。」

あれ??自分で走るって言ったのに・・・。太陽とかなり差が付いてる・・・。私こんなに走るの遅かったっけ?

「ほれ。」

気付けば太陽は目の前にいた。太陽の手をつかんだら、そのまま引っ張られた。なんかデジャヴ。昨日のあれだ・・・。

着いたけど、疲れた。これから授業とかあり得ないし。

「オレはこの後校長室行って転校手続き完了させてくるから!ＨＲ中にはおまえのクラス行くから!!じゃーな!」

と言いながら太陽は、私の靴がある下駄箱と反対方向の下駄箱に靴を置いて出て行った。

ガラッ

本来、誰かが教室のドアを開けると「おはよう。」って聞こえてくるはずなんだけど。私の時には聞こえない。1年の前期までは友達だっている方だった。後期に入ってからは徐々に友達が減っていった。私が減らしたのかもしれないね。どうでもいいんだ。私の話相手は一人で十分。変なやつだけどちゃんと話を聞いてくれる。うん。あの方で十分、十分。

「今日、転校生来るんでしょ?」

「男子だって!カッコいいかなぁ??」

「いやぁ。あんま夢見ないほうがいいよ・・・。」

「あっはははははは・・・！」

「あ、千歳の隣じゃん！むかつく。」

「まだカッコいいって決まってないから！」

私の名前気安く呼んでんなよ。もうみんな太陽のこと知ってるのか。あ、この子達だよ。「彼氏欲しい。」って言うのが日常茶飯事になっちゃってるっていう人達は。私はあまりかかわりたくない。嫌な思い出ばっかりだから・・・。

キンコーンカンコーン♪

あれ、あっという間にＨＲの時間だ。私の席は一番後ろ。くじ引きでこうなった。私は窓際から2番目の席。人数の関係でこうなってんの。もう机が置いてある。ここが太陽かな。

先生が入って来た。太陽が横にいる。

女子うるせぇっ。男子は固まってる。そういや太陽に苗字ってあんのかな。先生がチョークを持った。

五十嵐　太陽

「五十嵐太陽（いがらしたいよう）です。よろしくおねがいします。」

すごい歓声。でも今一番驚いてるのは私だと思う。

「五十嵐」って私の大好きな歌手の名前。太陽は知ってたのかな？なんかすごい。

「五十嵐の席はあそこな。」

案の定私の隣だ。あぁ、やっぱ女子に睨まれてる。気にしない気にしない。

太陽が席に向かって歩く。

「よ。驚いた？」

「当たり前じゃん・・・。知ってたの？」

「それこそ当たり前じゃん？」

「そっかぁ。」

なんか照れた。

キンコーンカンコーン♪

終わったー！次は理科か。教室だよな。うん。準備して待ってようっと。

ドカッ！

なんだよ？？ちょっとムッとしながら左側に顔を向けると・・・。

アンビリーバボー。なんだこの女子の群れは！あり得ないだろ！

「太陽君っていうの？あたし、西田愛里沙（にしだありさ）っていうのー。よろしく。ありさって呼んで？」

西田がそう言った瞬間、

（呼ぶかよ・・・。）

太陽が言った。ストレートに言うんだね。それにめっちゃ無表情！

「あぁ。」

ありっ？！「あぁ」？それって、ＯＫってこと？どっちなんだよ。面倒くさそうなとことか同じ感じな言い方だけど・・・。わけ分かんない。

「あたしは佐々木智美（ささきともみ）！ともって呼んで？」

（うぜぇーなぁ・・・）

あれ？これって・・・。

「あぁ。」

また「あぁ」か！

おっと、もう1時間目始まるよ。

キンコーンカンコーン♪

「起立、気を付け、礼。おねがいします。」

これやんなきゃいけないのかな?まぁ礼儀は大事だよねぇ・・・って。なんでまたこっち見てんの??

(教科書見せてほしい。)

あぁ。まだ届いてないのね。仕方ない。

「え?」

太陽が不思議そうな顔してる。こっちが「え?」だよ。まったく。

「はい。教科書見せればいいんでしょ?自分で言ったんじゃん。」

「オレ言ってねぇよ?」

「はい?」

言ったじゃん。「教科書見せて」って。ん。これってまさかの・・・。

「お前もオレの心読めるようになったのか?」

なぜ嬉しそうに言う?こちらとあんまり嬉しくないぞ?人の気持ちなんて知れたらろくなこと言われないよ・・・。

「オレは言わねぇけど・・・。」

なんでそんな顔して言うの??

「これ、夢咲、五十嵐！教科書見せるのはいいが話を聞いてくれ。」

やばっ。注意されたよ。

「すいません。」

もう。女子の視線がチクチク刺さってくる・・・。そんなみるな！私悪いことしたか？

（おまえもオレの心読めるんならずっと心で会話しようぜ！）

（そう言われてもね、顔みてなきゃ何言ってんのかさっぱりだよ・・・。だから授業中は黙って授業を受ける。分かった？）

（えぇーー。オレは喋りたいんだけど・・・）

（知らないよ。だって怒られたら成績落ちて高校いけなくなるんだよ？）

（高校？おまえ高校行きたいの？）

（当り前でしょ？！）

「これ！夢咲と五十嵐！仲良いのは構わんが今は板書をせい！板書を！」

「はい・・・。」

まただ・・・。不思議と今は成績よりみんなの顔の方が気になる・・・。さっさと黒板写そっ！

トントン。

（だから！シャラップ！黒板写せ！）

（いや、書くものねぇーんだよ。）

びりっ！

（はい！これあげるからもう話しかけないで。）

キンコーンカンコーン♪

無事に終了・・・。隣の人のおかげで今日は二度も注意された。以後気を付けねば。

「なぁ。」

「なに？！」

「この後も教科書見せてほしいんだけど・・・。」

「いいけどだ・・・っ！！！？」

私の話を遮るように西田達が入って来た。

「太陽君教科書ないの？あたしの貸してあげるよ？」

「いらない。オレはこいつの借りるからさ。」

そう言って私の頭に手をのせた。おい。縮むだろ。

「な・・らいいんだけど・・・。」

西田さん？おもくそ睨んでます？？どうしたらそんな眼つきが出来るの？今度練習して太陽にやってみようかな。効くかな。この人に。

「ちょっと。ずっと思ってたけど私のこと、こいつとかおまえとか！しかも頭に手置いちゃって！私のことなんだと思ってんの？！」

「じゃ、ち・と・せって呼ぶよ。」

「そういうことじゃなぁーい！」

あ、しまった。ここは教室だ。私はこんなキャラじゃない。

「いいじゃん別に。それがホントのおま・・・千歳（ちとせ）なんだろ？だったらそのままでいろよ。」

「無理。」

「なんで？」

「こういう性格だからなにもかも上手くいかなくて、大切なものどっか行っちゃうんだよ！」

「なんでそんなこと・・・。」

太陽が黙った。私は熱くなって涙目だった。

あれも丁度1年くらい前かな。

転倒

1年前・・・

ーーーー

誕生日があと少しで来る。この年になっても誕生日が近付くとうきうきする。今年はなんと！ミュージックプレイヤーもらうの！もう言っといたからきっと買ってるよね？あ、もう時間だよ。行こう。

「いってきます！」

あれ？返事がない。なんか嫌な気分だな。きっと台所で洗いものしてて聞こえないんだ。じゃぁ・・・。リビングのドアを開けて。と。

「いってきまぁす！！」

どうだ？

「あぁ、いってらっしゃい。」

うん。満足。

今日もいい天気だな。太陽出てる。汗っかきだから正直、太陽には雲に隠れててもらいたい。

ガラッ

「おはよー！」

私は人より声がでかい。だからみんな私の声に気付いた。

「あ！ちとちゃん、おはよう！」

「ちと、おはよー。」

毎朝声をかけてくれるのは小学校からの親友、のん。優しいから大好き！あと、違う小学校の中で一番最初に友達になった、ことちゃん。今は3人で仲良しなんだ。

「ちと！後期委員会どうする？私は美保委員やりたい！」

「へぇ、のんは美保委員がいいの？！頑張って！多数決になったら絶対手挙げるね！」

「ありがとっ。」

「ことちゃんはなにやるの？」

「あたしは規律かな。」

「規律かぁ。大変そうだよね。」

「ちとはなにやんの？」

「私は学級委員！！」

「うん。ちとちゃんならなれるね。あたし絶対手挙げるよ。」

「ありがとうね。」

キンコーンカンコーン♪

1時間目のＬＨＲ。ここで委員会決めがある。後期まで2ヶ月あるけど今決めないと間に合わないんだって。

「まず、学級委員の立候補者はいますか？男女各一名ずつです。まずじゃあ、男子から！」

「はい。」

一人しか挙げてない。黒崎君か。この人、何気人気あるよね。どの部分がいいのかよく分からないけど。いまどきって男なら誰でもイケメンって言われない？？あ、黒崎君ごめん。別にあなたの悪口を言ったわけでは・・・。

「黒崎君だけですか？そしたら黒崎君に決定します。拍手。」

パチパチ・・・

「では次、女子！いますか？」

すかさず手を挙げると・・・。あちゃ。愛里沙(ありさ)ちゃんも手挙げてるよ。事前調査では誰もいなかったから安心してたんだけど。こうなったら戦おう。

「二人ということなので多数決になりますね。二人は前に出て意気込みをどうぞ。」

愛里沙ちゃんが私に先言えって言うから先に言うことにした。

「えっと、前期は放送委員をしていたんですけど、前期に学級委員をやっていた西田さんを見て、私も学級委員になってみんなをまとめたい。と思ったので、立候補しました。よろしくお願いします。」

どうや。下手に出る作戦だい！

「私は前期も学級委員をしていて、やりがいがあったので、後期もやりたいなと思ったので立候補します。よろしくお願いします。」

まぁ、どっちがなっても恨みっこ無しだよ。

「はい。ではみんなは伏せてください。どっちかに一回だけ手を挙げてください。」

うわぁ。緊張するなぁ。私にもみんなの様子は見えないからな・・・。

「ではまず、福井さんから。福井さんがいいと思う人は手を挙げてください。」

・・・。

「はい。では次、西田さんがいいと思う人は手を挙げてください。」

・・・。

「はい。目を開けてください。多数決の結果、福井さんに決まりました。みなさん拍手！」

パチパチ・・・

あ、のんが笑ってる。嬉しいな。頑張らなくっちゃ。

チッ・・・

ん？舌打ち？愛里沙ちゃんそんなにやりたかったのか・・・。悪いね。でも勝ったもん勝ちじゃん？なんて当たり前のこと言ってんだあたしゃぁ。黙って席につこう。

順調に委員会も決まり、のんは美保委員になれた。でもことちゃんは・・・。一票差で負けちゃった。すごく悔しかった。でもまた来年もあるもんね。

今回の委員会決めで、大きく何かが変わる事とも知らず、私はのんきなことばっかり考えてた。

翌日。

「おはよー！」

教室に入ると、のんとことちゃんがいない。どこだ？あ、いつものとこかな。二人が朝行くところと言えばただ一つ、トイレだ！

キィーー

トイレに入口を開けるとやっぱり二人はいた。

「のんとことちゃんみつけたっ！なにしてんの？」

そう言った私の眼に映ったことちゃんの顔は、今までとは少し違うふうに見えた。

「あのさ、ちと。ちとは大事な友達と思うから正直に言うよ。昨日の委員会決めの時、ことに手挙げなかったってホント？」

はぁ？確かにこの手を天まで届くくらい思いっきり挙げましたけど？

「挙げたに決まってんじゃん！なんでそう思ったの？」

「え、愛里沙が言ってた。そうじゃないならいいんだけど。」

え、全然よさそうじゃないけども。ま、いいっていうならいいのかな？

やっぱりこの時もまだのんきなことばかり考えてた。私には危機感というものが全くなかったんだよ。この日も、その次の日も、ことちゃんとのんは私から一線引いたような態度だった。

――――

そしてこの出来事から2週間後、誕生日がやって来た。

私は頼んでおいたミュージックプレイヤーをもらった。うれしくてうれしくて、誰かに自慢したかったけど、操作の仕方も何も分からない。あ、まず充電か。充電完了したらお父さんに操作の仕方教えてもらおうっ。

「千歳！ケーキ、ケーキ！」

私はショートケーキが少し苦手。だから毎年チョコケーキ。本当においしいんだ。

「千歳いくよ？ハッピバースデイトゥユー♪・・・」

恒例の歌を両親が歌ってくれた。それから１３本のロウソクを吹き消した。

「千歳は１３才か。まだまだ子供だね。」

「えぇ、でも電車は大人料金だよ。だから子供ではないよ！」

「そうか。」

優しく笑うお父さん。

この後も、家族３人でずっとおしゃべりしてた。

「そろそろ充電できたんじゃない？」

お母さんがミュージックプレイヤーを充電器から外してくれた。それからお父さんが操作方法を伝授してくれた。早速ＰＣで「五十嵐」の曲を入れた。やった。これから毎日、五十嵐の歌が聞けるんだ。

やっぱりのんとことちゃんは余所余所しくて、誕生日が来るころにはもう、ほとんど口さえも利いてなかったと思う。

私は内心、そのことをすごく気にしてた。

ーーーー

私の誕生日から3ヶ月後、お父さんがいきなり離婚宣言をした。どうやらいきなりと思ったのは私だけだったらしい。お母さんも前から、お父さんに好きな人がいたことは知っていたらしい。この時点で家族の内で私だけ知らないことがあったと思うと寂しい気持ちだった。

お父さんは出て行った。責任を負うため家のローンとかは払ってくれるって。いつも3人で笑ってて、いつまでも3人で笑い続けられると思ってたのに。ダメだね。平和ボケは。

お父さんが出て行ってから2週間後。今度はお母さんまでいなくなっちゃった。なにこれ？お母さん？お母さんはずっと私と一緒にいるって言ったじゃん。破るためにある約束なんていらないよ。

文章にしたらたったの7行かもしれない。けどこの7行の間に私の中でいろんな感情が生まれた。しかも今、私、もしかするとかなり落ち込んでるかもしれない。誰かに話すと大泣きしちゃうかもしれない。だったらもう黙ってよう。ていうか今、ケンカ（？）中だから話す相手もいないんだけど。

ーーーー

このまま夏休みに入り、私の苗字は変わった。夏休み中は、うだうだして、宿題して、うだうだして、を繰り返し、夏休み明け早々テストがあったから、テストの一週間前からは勉強をした。

まぁ、テストは悲惨なことになってた。のんやことちゃんともいまだに口を利いていない。でももういいの。弁解する気にもなれない。

てか、私は否定したし。信じなかったのは向こうだし。

これの何日後くらいかな？

誰かが先生に、このこをと話して、ことちゃんに私が手を挙げたかどうか聞いたらしい。もちろん先生は事実を伝えた。そっから広まるのは早かった。ことちゃんものんも、すぐにそのこと知ったらしい。青い顔してた。それから、私に謝りに来た。私は「別に気にしてない。」その一言だけ言い放ってその場を去った。

もう2人と関わる気はなかったから。

人は信じられないって暴君ディオニスも言ってたし。あ、でもディオニスも最終的には人を信じれるようになったんだよね。

翌日

「今日の放課後は各種委員会があるので、委員の人は残ってください。」

まじか。部活サボれるじゃん。ま、ここ最近行ってないけどね。んーと、学級委員は1年1組か。隣のクラスね。移動しなきゃ。

「福井！もういく？」

「いくけど。私もう夢咲だから。」

「あ・・・。ごめん。じゃあ、一緒に行こうぜ。」

「・・・うん。」

長い。話が長い。社会の先生、益子(ますこ)先生はもうすぐ定年。喋るのがとても遅い。私的に可愛いから好きなんだけどさ、眠くなるんだよね。

「なぁ、益ちゃん話し長くね？」

益子先生の愛称（？）は益ちゃん。本人の前では呼べないけど・・・。

「ね。長いね。」

この後15分後、ようやく委員会は終わった。よし。帰ろ。リュック背負って教室を出ると、

「なぁ、夢咲。夢咲って2丁目だよな？俺3丁目だから途中まで一緒に帰ろうぜ！」

「まぁ、別にいいけど。」

断る理由ないしいいや。と思って一緒に帰る事に。

この後、黒崎君は私からすれば興味ない話を延々とし続けた。私の子の判断ミスで、またまた私を悲劇が襲う。

この後2日後くらいかな。黒崎君に呼び出された。何の話だろう。私はまだこういうのがよく分かんなくて、呼び出されたのに無視してはいけないと、素直に行ってしまった。

「なんで私のこと呼んだの？委員会の話？」

「違くて・・・。あのさ、俺、ずっと夢咲のこと好きだったんだ。付き合ってほしい。」

・・・はひ？付き合う？ってあの・・・。え？男女が一緒に帰ったりデートしたりのあの付き合う？

「ごめん。無理。」

言葉が見つからないからストレートに言った後、速攻で家に帰った。

悲劇はここからだ。翌日、学校に行き、教室に入った瞬間、愛里沙ちゃんが泣きはらした顔で私に掴みかかろうとした。なにかに襲われると思ったら条件反射でよける。これが人間だろうに。よけられるとは思ってなかったらしく、愛里沙ちゃんは顔から・・・。

「くそ！なんなのよあんた！」

いや、そっちこそなんだよ？いきなり掴みかかってきて。びっくりするでしょう。

「和哉（かずや）に色目使って近付いたくせに、挙げ句の果てに告られたら振るってアンタどんな神経してんの？！」

なんだかさっぱりだ。この人は何を言ってんの？大体、和哉って誰よ？色目って何？告白の部分しか分かんなかった。

面倒くさいからスルーで。

「なに？逃げんの？卑怯者！」

私が振り向くと・・・。あ、黒崎君だ。昨日の今日だからちょっと気まずい。

「和哉！こいつでしょ？色目使って近付いて、こっちがちょっとその気になって告ったら振って来たって奴！！」

何の話じゃコラ。ってか、黒崎君が和哉！？あ、そういうことか。

「うん。そう。」

うん。そう。って、えぇぇぇぇぇぇ？？？？？私があんたにいつ色目を？しかも色目って何？

「ごめんな愛里沙。お前と付き合ってんのに告ったりして。俺どうかしてた。」

そうだよ。付き合ってる恋人というものがありながらよそ者に告白するとか、こいつこそどんな神経してんの？ってか、話が違くない？何でこいつに私が迫ったみたいになってんの？？否定しろやボケ黒崎。西田も調子乗んなよ？！てか、私に告白したお前の彼氏は許すんかい！！

「アンタ、黙ってないで謝れよっ！！！土下座しろっ！！！！！！！」

あれ、私・・・。

ここから記憶が飛んだ。後々耳にした噂によると、私はその黒崎って男をちょっと痛い目に合わせてしまったていう話だね。

この一件で私は男が嫌いになった。

――――

切れない想い

太陽が困っている。周りの人もめっちゃ見てる。太陽がまた私の腕をつかんだ。

「ちょっとこい。」

「怒ってるの？太陽？」

「いや、全く。」

「そのさ、私がこんな性格だから大切なものがどっかいくってどういう意味？」

「あぁ。それは、うん。なんか、1年の頃、告白されたの。あ、あの時はもう太陽、私の近くにいたと思うよ。それでね、私はその子に対して普通に接してたはずなのに、勝手に好きになられた。そしたらみんなに恨まれた。その人が勝手に私のこと好きって言って、私はしっかり断ったのに。なのに私だけ悪者にされて、もう面倒くさいから弁解もせずにその男子殴っちゃって・・・。元はと言えば私の性格がいけないのかなぁって。でも、性格なんて早々変えられないでしょ？だから誰とも話さなきゃいいんだって。もし友達がいたら話せたけどさ、友達さえいないんだよ？笑っちゃうよね。おほほ。」

「おい、無理に笑かさなくていいんだよ。辛かったんだろ？ホントは。友達に信じてもらえなかったときだって。その男達に悪者にされたときだって。なんでそんなに頑張るんだよ？」

「頑張ってない。普通にしてるだけ。」

「千歳の普通っていうのは人と話さない事か？違うだろ？もっと話せよ。いいことも嫌なことも。頑張って友達作ってみりゃいいじゃん。無理だって言わないでさ。な？」

「・・・うん。そのうちね。」

「うん。そのうちでいいから。やべぇ。教室戻らなきゃ。」

「ね。」

――――

今日も一日終わった。“無事”とは言えないけど・・・。でも、太陽にあのこと話せてよかったな。って思ってる自分もいる。太陽もたまにわけわかんないけど、最近自分もわけわかんない気持ちになる事がある。

あ、太陽は私と一緒に帰るのかな。太陽は靴あっちにおいてたっけ。行ってみよう。

「・・・。」

太陽の靴が置いてある下駄箱の方に近づけば近づくほど高くて大きな声が耳に響く。

「太陽君！メアド教えて！」

「太陽君、一緒に帰らない？」

ふれあい広場みたい。私は傍観者のごとく、つっ立ていた。ん？また聞こえる。

（これじゃあっち行けねぇじゃん・・・・。）

太陽の声だ！あっち？あっちって・・・・。どっち？太陽が私に気付けば心で聞けるんだけど・・・・。

こっちむいて！太陽！

そう強く思ったその時。

「あ、千歳！！」

太陽が私に気付いた・・・のはいいんだけど、他の女子がおもいっきり私を睨む。そんなこと気にもせず、太陽は女子の群れをかき分けてこっちにきた。

「千歳から来るとは思わなかったな。」

「え、だって先帰ったら感じ悪いと思って・・・・。とにかく早く行こう。」

さすがの私もあそこまで睨まれたら動じてしまうよ。

急いで走った。あ、やっと校門。

「あのさ、太陽。女子の前では私の名前呼ばないで。」

「なんで？」

「私がすごい目で見られるの！太陽だって分かるでしょ？あんな露骨に睨んできたら・・・。」

あれ？めっちゃびっくりした顔してない？

「なんでオレが千歳の名前呼ぶといけないんだ？」

「だから！基本女子と男子は名前呼びなんてしないの。よっぽど親しくないと。だから、私と太陽が親しいと思われたら私が何されるか分からないの・・・。」

「千歳もオレのこと名前で呼ぶじゃん。」

「太陽には苗字ないでしょ！？とにかく、うん。ダメだよ？」

「いやだ。」

はい？

「あんな奴らのせいでなんでオレが千歳を名前で呼べなくなるんだ？おかしくね？そうだ。オレはこの先もずっと千歳は千歳って呼ぶ。他の奴がなんか言うならオレを呼べ。ならいいだろ？」

んー。微妙によくない気もするけど・・・。そこまで言うなら。

「ま、いいか。」

私が仕方なく笑うと、太陽はすっごいニコニコしてた。

家に着いた。私がまず最初にしなきゃいけないこと。それは・・・。

「手洗いうがいだろ？」

「違います。お金のことだよ・・・。ホントにどうしよう。これから生活費が尽きて２人とも餓死しちゃったら？！嫌だな。」

「いや、落ち着け？この家は母子家庭だから手当が支給されるだろ？」

「うん。でもそれは私だけしか受け取れないから・・・。」

「なんで？」

「だって太陽は戸籍上私の姉弟じゃないし・・・。てか、太陽に戸籍なんてあるの？」

「一応ある。けどこの世には存在しない。」

「・・・ないんじゃん。」

「この世に存在しないからってないって決めつけちゃいかんぞ。オレは空より高いとこにある星で生まれたから、そこに戸籍がある。」

「ふぅん。戸籍はあるのか。でもこの、地球で、日本に戸籍がないと意味ないの。」

この後しばらく太陽と２人で、お互い無知ながらも頑張ってお金についての討論を繰り広げた。

そんな中・・・。

ピルルルルルルルルッ・・・

電話だ。また知らない人だ。

「はい。夢咲です。」

「あ・・・、千歳か？お父・・・さんじゃないんだよな。」

「お父さんでいいよ・・・。」

「そうか？いや、実は昨日、お母さんが病院に運ばれたってこと聞いてさ。お母さん、多分この後１０年くらいは家に帰ってこないと考えた方がいい。それで、千歳もその家で１人で暮さなきゃいけないだろ？でもまだ中学生だからお金は稼げない。だからお父さんが毎月仕送りをする。今さらお父さんなんて言えるような立場じゃないのにごめんな。けど、これくらいのことしかできないからさ。明日くらいに千歳名義の口座をつくってくれ。つくりかたは窓口で聞いてな。作ったらまた電話くれ。じゃあ。」

ツーツー・・・。

あら、一件落着しちゃった。もう、お父さんではない人なのに、お父さん、以外では呼べなくて。それに、家族でなくなった今でも私のことを気にしてくれる。ずるいよ・・・。もっと簡単に憎めたらいいのに。大嫌いだって。大声で言えたらいいのに。それすらできないよ・・・。

「千歳？なんだった？」

「あ、お父さんが、お金は毎月仕送りするから口座を作りなって。」

「まじか。じゃ、明日作りに行こうぜ！」

あれ、そんなノリ？そっか。別にそんなに考え込むほどのことでもないし、お金の心配はいらなくなって、喜ぶべきだよね。

「でも、お母さんはやっぱり、この後刑務所に入ると思う。だから明日、口座作ったら、最後にお母さんに会ってくる。」

「うん。そうしな。」

「それで、ひとついい？」

「なに？」

「太陽もお母さんに挨拶して？誰も太陽の存在を知らないなんて、嫌な感じだから・・・。なんかうまく言えないけど、お母さんには太陽の存在をしっかり認めてほしいんだ。」

「うん。当たり前じゃん。」

やっぱり優しく笑う。なんでそんな笑顔が出来るの？私はいつだって作り笑いなのに。それでも最近、太陽の前だけは自然と笑えてる気がする。私の勘違い？ま、いっか。

Bad but mohter.

次の日、学校が終わってから、直接銀行に行って口座を作った。それだけのことなのになぜか大人の階段登った気がした。次はお母さんの病院。電車で2駅のとこ。

「夢咲です。」

受付の人に一言そう言うと、すぐに部屋を教えてくれた。この前とは違うとこ。お母さんあの後起きたのかな。電話とかがないから無事だってことは分かってるけど目を覚ましたかどうかは分からない。

２０５号室　夢咲様

ここにお母さんは入院してるらしい。ノックして・・・。

「お母さん、入るよ。」

返事を待たずに扉を開けると・・・。お母さんが横になってる。あれ、太陽？なんで入らないの？

「千歳？」

起き上がった。

「千歳・・・。ごめんなさい。」

お母さんが私に謝った時、

（今は2人きりの方がいい。）

そう聞こえたから頷き、扉を一旦閉めた。

「お母さん。私さ、寂しかったんだよね。」

だめだ。涙が。

「本当にお母さん、許されないことしちゃったわ。」

お母さんも泣く。

「でもね、お母さん。私、大丈夫。今独りじゃないんだ。太陽・・・。入って？」

「太陽？・・・あら・・・。」

太陽は気まずそうに入って来た。

「お母さん、信じらんないと思うけど、この人、太陽って言ってね、生まれた時から繋がってたって言うか・・・、んー。なんていうのかな・・・。」

私が、うまく説明できなくて困ってると、

「前、お会いしましたよね？」

はぇ？？お母さん？

「はい。やっぱり見えたんですか？」

なにそれ？わけわからない。

「あの、いつだったかな、お父さんとの離婚が決まった時くらいかしら？家に見知らぬ男の子が見えてたんだけど・・・。いつの間にかいなくなってて、太陽君だったのか。」

「はは、千歳より先に見えるとは。」

はは、じゃないでしょ？

「太陽のこと知ってたの？」

「知ってたと言うか見えたのよ。幽霊かと思ったわ。」

説明の必要なかったね。あれ、お母さん元気じゃん。いつものお母さんだ。これで一緒に・・・は無理だよね。お母さん、この後刑務所に行くんだよね。

「千歳。お母さん、ホントにいけないことしちゃったの。知ってるよね？でね、お母さん多分、この先１０年くらいは刑務所出れないの。だからね、これ。」

お母さんの手に握られてたのは水色の携帯電話。私の大好きな色。

「病院に運ばれる前に急いで買ったのよ。」

「なんかやだな。それ！」

私は泣きながら笑った。

「これでそれなりに不便はなくなるでしょ？料金とかは手当てから払ってもらうことになっちゃうけど・・・。」

あ、それなら・・・。お父さんのことは言わなくていいか。

「お金のことなら大丈夫！お母さんは私のこと心配しないでね。それじゃ、そろそろ行くね。元気になって帰ってきてね。」

いやだ。お母さんと離れたくない。お母さんと一緒に帰りたい。

「千歳、ごめんなさい。ありがとね。太陽君も。」

お母さんは最初から最後まで謝ってる。お母さんは悪いことをした。けど、更生できないことないよね？だってお母さんだもん。大丈夫。信じよう。

「うん。バイバイ！」

扉を閉めた。泣かない・・・。

ん？肩になんか・・・。太陽か。やめてよ。

「っ・・・、うぅ・・・。」

こらえ切れなかった。でも、肩に置かれたこの手が言う。「強がったって意味ない」って。

「スッキリしたか？」

太陽が私の顔を覗き込んだ。

「ん？したけど・・・覗かないでくれないかな？」

「すいませんね。帰るか。」

「うん。」

太陽と手をつないで帰った。なんかよくわからないけど勇気が出た。

「そうだ。」

「なに？」

「太陽も携帯持とうよ！それがいいよ！」

「今から買いに行こう！」

「今から？遅くなるよ。」

「別にいいじゃん。行くよ！」

いつもは太陽だけど、今回だけは私が手を引っ張って、ケータイショップに連れて行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5909z/

おひさまsummer

2011年12月30日22時47分発行